

## 児童からみた「母親の父親観」と「父親イメージや態度」...20年前との比較

佐藤 宏 治\*      佐々木 久 長\*\*

### 要 旨

児童による「母親の父親に対する態度」の評価と「父親のイメージや態度」との関連性が約20年間でどのように変化したかを検証した。1987年と2006年に群馬県内の小学校3校の6年生の児童を対象に、ほぼ同じ内容で調査を実施した。調査対象者は1987年が350名（男子181名・女子169名）、2006年が218名（男子102名・女子116名）である。調査内容は1）母親の父親に対する態度、2）父親に対するイメージや態度である。調査の結果、どちらの調査でも児童の母親の父親に対する態度の評価が父親に関するイメージや態度の形成に関連していた。また、20年間で父親のイメージは全体的に低下し、態度では尊敬と同一視する傾向が著しく低下していた。

### はじめに

20年程前、非行の増加、また家庭内暴力や不登校という問題が新聞紙上でも話題になった。原因の1つとして、核家族化の進行にあわせた「父親不在」や父性の欠如、あるいは、母子癒着等の問題点が指摘されていた<sup>1)2)</sup>。それでは、その父性の欠如を補ったり、精神的に不在の父親を存在させるにはどうしたらよいのだろうか。

父親・母親・子どもという家族内の人間関係を考えたとき、日常的に子どもとの接触時間の多い、母親の父親観が子どもの抱く父親観へ与える影響が大きいのではないかと推測した。外国の例では、かつてLynnが、母親の父親観の影響について研究していたが<sup>3)</sup>、しかし、母親の父親観が子どもの抱く父親観へ影響を与えていることの実証的な研究は我が国では見当たらなかった。そこで、20年前その影響について調べようと、地域の小学校3校の6年生を対象にアンケート調査を行い、母親の父親観と子どもの抱く父親観との間に関連のあることを示した<sup>4)</sup>。

そして20年後の今日、不登校やいじめの問題は相変わらず存在し、「ニート」と言われる人達の増加、「ひ

きこもり」という現象、校内暴力の小学校での増加等が報道されている<sup>5)</sup>。父性の欠如はその後どうなったのであろうか。また家庭内での父母の関係や親子の関係はどうなっているのであろうか。さらに「父親力」という言葉も登場してきたが<sup>6)</sup>、父親の姿は変わってきたのだろうか。

子どもの抑うつ傾向と夫婦関係との研究では、「母親の父親に対する愛情度があるレベル以下の低いものになった場合に子どもに対する影響も顕著になってくる」という可能性を指摘する研究もある<sup>7)</sup>。また、父親が自分自身をどのような父親だと思ふかという調査<sup>8)</sup>、子どもから見た父親像と父親自身から見た父親像との比較を調べたもの<sup>9)</sup>はあるが、現在でも母親の父親観と子どもから見た父親像とを関連づけた実証的な研究は見当たらない。

また、父子関係の変化を探るべく、父親の役割につながるいくつかの項目を父親像との関連で調べてみたいと考えた。小高は、「現在の息子は、25年前の息子に比べ、父親からの心理的な統制が強いと感じており、また、同一化傾向も強いと感じている<sup>10)</sup>」と指摘しているが、父親像との関連でその変化を調べたものは見当たらない。

\* 群馬県安中市立磯部小学校

\*\* 秋田大学医学部保健学科看護学専攻

Key Words: 親子関係  
父親イメージ  
夫婦関係  
変化

以上の理由から、20年後の親子関係の変化を比較してみたいと考え、同じ小学校を対象に、同じ調査項目を用いて調査を行った。

## 研究の目的

児童からみた「母親の父親に対する態度（母親の父親観）」と児童の「父親イメージや態度」と、またその関連性が約20年の間でどのように変化したかを検証することが本研究の目的である。

## 研究の方法

本研究では、1987年に実施した調査と同じ項目を含む調査票を用い、同じ学校の同じ学年の児童を対象に調査を実施した。

### 1. 対象と調査方法

前回調査と今回調査共に高崎市内（旧：群馬町内）の小学校3校の6年生を対象に行った。

対象者は前回調査367名、今回調査255名であった。本研究の仮説は両親の存在を前提にしているため前回調査では17名が、今回調査では37名が両親又は父母のいずれかがいないために対象外となり、分析対象は前回調査が350名、今回調査が218名であった。

基本的属性については、前回調査は男子181名（51.7%）・女子169名（48.3%）、核家族262名（74.9%）・拡大家族（両親と子ども以外の家族が同居している家族）88名（25.1%）、母親が有職197名（56.3%）・無職153名（43.7%）であった。今回調査では男子102名（46.8%）・女子116名（53.2%）、核家族148名（67.9%）・拡大家族70名（32.1%）、母親が有職168名（77.1%）・無職48名（22.0%）、無回答2名（0.9%）であった。

調査は、学級担任が各学級で調査票を配布、その場で回答を求め、回収した。

### 2. 調査時期

前回調査は1987年6月に、今回調査は2006年2月に実施した。

### 3. 調査内容

今回分析の対象とした調査内容は、基本的属性（性別、家族構成）の他、児童からみた母親の父親観（あなたのお母さんはお父さんのことを ほめる、悪く言う、大切にしている、尊敬・軽蔑している、仕事をどう思っているか、ていねいな言い方をするか、遅い帰

宅をどう思っているか、考え方に賛成するか、の8項目について3段階で評価した（大切にしているは「わからない」を含む5段階で評価し、3段階にまとめて分析した）。

父親イメージについては、対人認知に関する項目を中心に複数の研究者で検討した10項目（明るい 暗い、まじめ ふまじめ、元気 元気がない、責任感ある ない、自分勝手 思いやりがある、いらいらしている おちついている、頼もしい 頼りない、だらしない きちんとしている、弱々しい 強そう）について5段階で評価した。父親に対する態度は4項目（尊敬：偉いと思っているか、理解：わかってきていると思っているか、同一視：父親のようになりたいと思っているか・父親のような人と結婚したいと思っているか、注意：父親に注意されたときに従うか）について3段階で評価した（注意は4段階で評価し、3段階にまとめて分析した）。

### 4. 倫理的配慮

本調査は無記名で、回答したくない場合は未記入のまま提出してもよいことを説明して実施した。また家族構成から回答者が特定されないように配慮した。さらに、回収後各担任には児童の様子に大きな変化がないか注意してもらった。

## 結果

### 1. 児童からみた母親の父親観について

児童からみた母親の父親観について、前回調査と今回調査の結果を比較したものが表1である。今回は回答の選択肢を分類尺度として扱い $\chi^2$ 検定を行った結果、「仕事をどう思っているか」という項目以外の全ての項目において有意な差がみられた。

調整済み残差の値から、「ほめることがあるか」「どのくらい大切にしているか」では「よくほめる/とても・大切にしている」が減少し「ほとんどない/あまり・大切にしていない」が増加していた。また、「悪く言うことがあるか」では「よく言う」が増加し、さらに「尊敬・軽蔑しているか」では「尊敬している」が減少し「どちらとも」が増加していた。「丁寧な言い方をするか」では「時々する」が減少し「滅多にしない」が増加し、「遅い帰宅をどう思っているか」では「わからない」が増加し「寄り道だろう」が減少していた。

このように、全体的に児童からみた母親の父親観は肯定的評価が減少し、否定的評価が増加していた。

表1 児童からみた母親の父親観の変化

					人数 (%)
ほめることがあるか	よくほめる	たまにほめる	ほとんどない	無回答	
前回	49 (14.0)	180 (51.5)	116 (33.1)	5 (1.4)	$\chi^2 = 11.601$ (df = 2) p < 0.01
調整済み残差	3.0	0.4	- 2.4		
今回	13 ( 6.0)	109 (50.0)	94 (43.1)	2 (0.9)	
調整済み残差	- 3.0	- 0.4	2.4		
悪く言うことがあるか	よく言う	たまに	ほとんどない	無回答	
前回	15 ( 4.3)	179 (51.1)	155 (44.3)	1 (0.3)	$\chi^2 = 7.774$ (df = 2) p < 0.05
調整済み残差	- 2.5	- 0.4	1.7		
今回	21 ( 9.6)	115 (52.7)	81 (37.2)	1 (0.5)	
調整済み残差	2.5	0.4	- 1.7		
どのくらい大切にしているか	とても・大切にしている	わからない	あまり・全然大切にしてい	無回答	
前回	229 (65.4)	104 (29.4)	16 ( 4.9)	1 (0.3)	$\chi^2 = 13.448$ (df = 2) p < 0.01
調整済み残差	2.5	- 0.6	- 3.4		
今回	120 (55.0)	70 (32.1)	27 (12.4)	1 (0.5)	
調整済み残差	- 2.5	0.6	3.4		
尊敬/軽蔑しているか	尊敬してる	どちらとも	軽蔑してる	無回答	
前回	129 (36.9)	215 (61.4)	5 ( 1.4)	1 (0.3)	$\chi^2 = 18.547$ (df = 2) p < 0.001
調整済み残差	4.1	- 3.5	- 1.7		
今回	45 (20.6)	165(75.7)	8 ( 3.7)	0 (0.0)	
調整済み残差	- 4.1	3.5	1.7		
仕事をどう思っているか	りっぱな仕事	わからない	りっぱだと思っ	無回答	
前回	131 (37.4)	197 (56.3)	21 ( 6.0)	1 (0.3)	$\chi^2 = 0.057$ (df = 2) n.s.
調整済み残差	- 0.2	0.2	0.0		
今回	84 (38.5)	121 (55.5)	13 ( 6.0)	0 (0.0)	
調整済み残差	0.2	- 0.2	0.0		
丁寧な言い方をするか	よくする	時々する	めったにしない	無回答	
前回	48 (13.7)	142 (40.6)	159 (45.4)	1 (0.3)	$\chi^2 = 8.407$ (df = 2) p < 0.05
調整済み残差	1.3	2.1	- 2.9		
今回	22 (10.1)	69 (31.7)	126 (57.7)	1 (0.5)	
調整済み残差	- 1.3	- 2.1	2.9		
遅い帰宅をどう思ってるか	仕事が大変	わからない	寄り道だろう	無回答・他	
前回	179 (51.1)	87 (24.9)	54 (15.4)	30 (8.6)	$\chi^2 = 9.216$ (df = 2) p < 0.05
調整済み残差	0.9	- 2.6	2.2		
今回	112 (51.4)	82 (37.6)	22 (10.1)	2 (0.9)	
調整済み残差	- 0.9	2.6	- 2.2		
考え方に賛成するか	賛成するほう	どちらとも	反対するほう	無回答	
前回	107 (30.6)	216 (61.6)	24 ( 6.9)	3 (0.9)	$\chi^2 = 4.314$ (df = 2) n.s.
調整済み残差	0.4	0.8	- 2.1		
今回	63 (28.9)	127 (58.3)	26 (11.9)	2 (0.9)	
調整済み残差	- 0.4	- 0.8	2.1		

表2 父親に対するイメージの変化

刺 激 語	前 回 調 査		今 回 調 査		t	p
	N	Mean (SD)	N	Mean (SD)		
明るい 暗い	350	3.96 (0.940)	198	3.8 (0.91)	t = 1.690	n.s.
あたたかい つめたい	348	3.83 (0.935)	213	3.6 (1.03)	t = 2.349	p < 0.05
まじめ ふまじめ	350	3.68 (0.955)	212	3.6 (1.08)	t = 0.928	n.s.
元気 元気がない	350	4.33 (0.879)	214	3.9 (1.00)	t = 5.224	p < 0.001
責任感ある ない	350	3.99 (0.964)	213	3.8 (1.00)	t = 2.470	p < 0.05
思いやり 自分勝手	349	3.51 (1.079)	214	3.2 (1.29)	t = 3.547	p < 0.01
落ち着き いらいら	349	3.68 (1.034)	214	3.3 (1.11)	t = 3.239	p < 0.01
頼もしい 頼りない	350	3.97 (0.953)	214	3.7 (1.00)	t = 2.754	p < 0.01
きちんと だらしない	350	3.81 (1.034)	214	3.3 (1.11)	t = 5.122	p < 0.001
強そう 弱々しい	349	4.09 (0.916)	213	3.8 (0.97)	t = 4.223	p < 0.001

表3 父親に対する態度の変化

尊 敬	人数 (%)				$\chi^2$	df	p
	肯 定	どちらとも	否 定	無 回 答			
前 回 調 査	210 (60.0)	132 (37.7)	7 ( 2.0)	1 ( 0.3)	$\chi^2 = 30.907$	df = 2	p < 0.001
調整済み残差	5.0	- 3.5	- 3.5				
今 回 調 査	84 (38.5)	115 (52.7)	18 ( 8.3)	1 ( 0.5)			
調整済み残差	- 5.0	3.5	3.5				
理 解	肯 定	どちらとも	否 定	無 回 答	$\chi^2 = 11.143$	df = 2	p < 0.01
前 回 調 査	209 (59.7)	126 (36.0)	15 ( 4.3)	0 ( 0.0)			
調整済み残差	1.7	- 0.1	- 3.3				
今 回 調 査	114 (52.3)	79 (36.2)	25 (11.5)	0 ( 0.0)			
調整済み残差	- 1.7	0.1	3.3				
同 一 視	肯 定	どちらとも	否 定	無 回 答	$\chi^2 = 30.001$	df = 2	p < 0.001
前 回 調 査	119 (34.0)	157 (44.9)	73 (20.9)	1 ( 0.3)			
調整済み残差	4.3	0.4	- 4.8				
今 回 調 査	38 (17.4)	94 (43.1)	86 (39.4)	0 ( 0.0)			
調整済み残差	- 4.3	- 0.4	4.8				
注 意	肯 定	どちらとも	無 回 答		$\chi^2 = 0.002$	df = 2	n.s.
前 回 調 査	155 (44.3)	195 (55.7)	0 ( 0.0)				
調整済み残差	0.0	0.0					
今 回 調 査	97 (44.5)	121 (55.5)	0 ( 0.0)				
調整済み残差	0.0	0.0					

## 2. 父親に対するイメージ・態度について

父親に対するイメージについては、5段階を得点化して平均点を求めて前回調査と今回調査で平均値をt検定した所、「明るい 暗い」「まじめ ふまじめ」を除く全ての項目において有意に父親に対する肯定的イメージが低下していた(表2)。

また、父親に対する態度については、注意(注意された時に従うか)以外の項目において有意な差がみられ、前回調査に対して今回調査の方が肯定的な回答が減少し否定的な回答が増加していた(表3)。

父親に対するイメージを得点化し、その平均点を求めて肯定群と否定群に分けて態度との関係を調べた所、前回調査と今回調査共に、いずれの態度においても肯定群の方が父親への態度も肯定的であることが示された(表4)。

また父親に対して肯定的イメージを持っている群における父親に対する態度を前回調査と今回調査で比較した所、尊敬( $\chi^2 = 9.715$ , df = 1, p < 0.01)と同一視( $\chi^2 = 23.515$ , df = 2, p < 0.001)において有意に肯定的態度が減少していたが、理解( $\chi^2 = 1.699$ , df =

表4 父親イメージと態度との関連の変化

		態 度			人数 (%)
尊 敬	イメー	肯 定	どちらとも	否 定	
前回調査	肯 定 群	131 (77.5) 6.7	38 (22.5) - 6.0	0 ( 0.0) - 2.7	$\chi^2 = 47.250$ df = 2 p < 0.001
	否 定 群	71 (41.8) - 6.7	92 (54.1) 6.0	7 ( 4.1) 2.7	
今回調査	肯 定 群	59 (59.6) 5.9	40 (40.4) - 3.4	0 ( 0.0) - 4.4	$\chi^2 = 44.041$ df = 2 p < 0.001
	否 定 群	16 (17.6) - 5.9	59 (64.8) 3.4	16 (17.6) 4.4	
理 解		肯 定	どちらとも	否 定	
前回調査	肯 定 群	138 (81.2) 8.2	30 (17.6) - 7.1	2 ( 1.2) - 2.9	$\chi^2 = 67.444$ df = 2 p < 0.001
	否 定 群	64 (37.6) - 8.2	93 (54.8) 7.1	13 ( 7.6) 2.9	
今回調査	肯 定 群	74 (74.8) 7.2	24 (24.2) - 4.1	1 ( 1.0) - 4.9	$\chi^2 = 57.124$ df = 2 p < 0.001
	否 定 群	21 (22.8) - 7.2	49 (53.3) 4.1	22 (23.9) 4.9	
同 一 視		肯 定	どちらとも	否 定	
前回調査	肯 定 群	61 (65.6) 6.8	28 (30.1) - 3.2	4 ( 4.3) - 4.7	$\chi^2 = 51.391$ df = 2 p < 0.001
	否 定 群	13 (15.3) - 6.8	46 (54.1) 3.2	26 (30.6) 4.7	
今回調査	肯 定 群	32 (32.3) 5.7	49 (49.5) 1.4	18 (18.2) - 5.9	$\chi^2 = 44.041$ df = 2 p < 0.001
	否 定 群	1 ( 1.1) - 5.7	36 (39.1) - 1.4	55 (59.8) 5.9	
注 意		肯 定	どちらとも		
前回調査	肯 定 群	88 (56.8) 3.1	67 (43.3) - 3.1		$\chi^2 = 9.638$ df = 1 p < 0.01
	否 定 群	62 (39.2) - 3.1	96 (60.8) 3.1		
今回調査	肯 定 群	58 (58.6) 4.2	41 (41.4) - 4.2		$\chi^2 = 17.799$ df = 1 p < 0.001
	否 定 群	26 (28.3) - 4.2	66 (71.7) 4.2		

2,  $p > 0.10$ ) と注意 ( $\chi^2 = 0.081$ ,  $df = 1$ ,  $p > 0.10$ ) においては有意な差はみられなかった (図1)。

### 3. 母親の父親観との関連性

#### 1) 父親に対するイメージについて

児童からみた母親の父親観を肯定群と否定群に分け、それぞれ父親に対するイメージに関する得

点を求め t-検定を行った。その結果10項目全てにおいて肯定群の方が有意に良いイメージを示していた (表5)。

#### 2) 父親に対する態度について

児童からみた母親の父親観で肯定群と否定群に分け、父親に対する態度との間で $\chi^2$ 検定を行っ

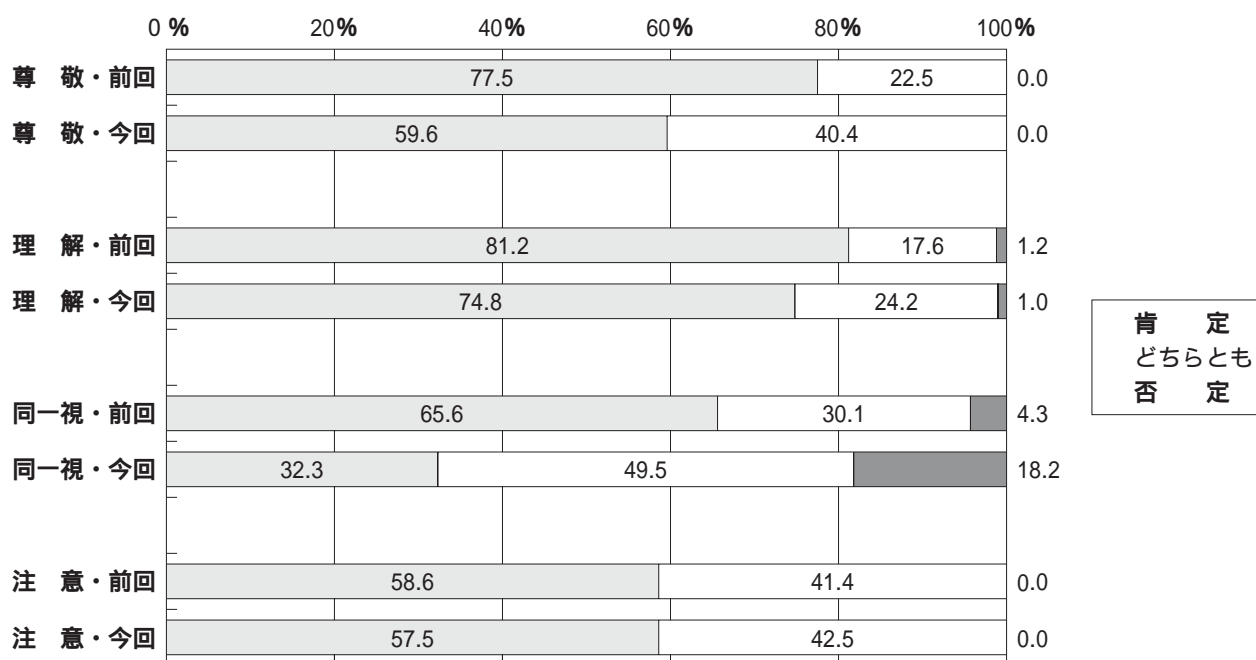


図1 父親に対する肯定的イメージ群における態度 (前回調査と今回調査の比較)

表5 児童からみた母親の父親観と父親イメージの違い

今回調査 刺激語	肯定群		否定群		t	p
	N	Mean (SD)	N	Mean (SD)		
明るい 暗い	100	4.1 (0.79)	92	3.5 (0.92)	t = 5.085	p < 0.001
あたたかい つめたい	106	4.0 (0.95)	100	3.2 (0.92)	t = 6.535	p < 0.001
まじめ ふまじめ	107	3.9 (1.03)	98	3.2 (1.02)	t = 4.824	p < 0.001
元気 元気がない	107	4.2 (0.92)	100	3.6 (0.98)	t = 4.824	p < 0.001
責任感ある ない	106	4.1 (0.89)	100	3.5 (1.03)	t = 4.590	p < 0.001
思いやり 自分勝手	107	3.6 (1.20)	100	2.7 (1.21)	t = 5.708	p < 0.001
落ち着き いらいら	107	3.8 (1.01)	100	3.0 (1.15)	t = 4.913	p < 0.001
頼もしい 頼りない	107	4.3 (0.84)	100	3.2 (1.00)	t = 8.751	p < 0.001
きちんと だらしない	107	3.7 (1.08)	100	2.9 (1.02)	t = 5.255	p < 0.001
強そう 弱々しい	106	4.0 (0.92)	100	3.5 (0.96)	t = 3.541	p < 0.001

(得点はいずれも高い方が肯定的な評価となる)

た. その結果, 全ての場面で児童からみた母親の父親観が肯定的な群の方が, 有意に父親に対する態度も肯定的であった (表6).

## 考 察

本研究の目的の1つは, 児童の抱く母親の父親観や父親イメージや態度が, 20年でどのように変化したかを明らかにすることであった. 母親の父親観は全体的に低下していたが, 特にほめる, 大切にする, そして尊敬するという積極的な支持的態度が大きく減少し, 悪く言うという否定的な態度が増加していた. 今回の調査は児童からみた母親の父親に対する関係性であるが, 最も身近な大人である両親の関係性において肯定

的な関係性のモデルが減少していることは, 良いモデルの学習機会の減少として児童の対人関係能力にも何らかの影響があるのではないだろうか.

また父親イメージや態度も, この20年間で全体的に低下していた. イメージでは「明るい 暗い」と「まじめ ふまじめ」以外全ての項目で否定的な方向に変化していたことは, 児童からみる父親イメージが20年前に比べて悪くなっていることを示している.

また父親へのイメージが肯定的な群では, 理解と注意の項目で前回調査と今回調査の結果に変化がなかったが, 尊敬と同一視では肯定的な反応が減少していた. 理解と注意は「わかってくれている」「注意に従う」という受動的な態度であるのに対し, 尊敬や同一視は能動的な関わりでもある. このように, 父親に肯定的

表6 児童からみた母親の父親観と父親に対する態度

尊 敬	肯 定	どちらとも	否 定	
肯 定 群	63 (57.8)	43 (39.4)	3 ( 2.8)	$\chi^2 = 36.594$ df = 2 p < 0.001
調整済み残差	5.8	- 3.9	- 3.1	
否 定 群	19 (18.8)	67 (66.3)	15 (14.9)	$\chi^2 = 49.114$ df = 2 p < 0.001
調整済み残差	- 5.8	3.9	3.1	
理 解	肯 定	どちらとも	否 定	
肯 定 群	83 (76.1)	22 (20.2)	4 ( 3.7)	$\chi^2 = 47.357$ df = 2 p < 0.001
調整済み残差	6.9	- 5.0	- 3.5	
否 定 群	29 (28.4)	54 (53.0)	19 (18.6)	$\chi^2 = 11.891$ df = 1 p < 0.001
調整済み残差	- 6.9	5.0	3.5	
同 一 視	肯 定	どちらとも	否 定	
肯 定 群	34 (31.2)	54 (49.5)	21 (19.3)	$\chi^2 = 47.357$ df = 2 p < 0.001
調整済み残差	5.2	2.1	- 6.2	
否 定 群	4 ( 3.9)	36 (35.3)	62 (60.8)	$\chi^2 = 11.891$ df = 1 p < 0.001
調整済み残差	- 5.2	- 2.1	6.2	
注 意	肯 定	どちらとも	否 定	
肯 定 群	61 (56.0)	48 (44.0)		$\chi^2 = 11.891$ df = 1 p < 0.001
調整済み残差	3.4	- 3.4		
否 定 群	33 (32.4)	69 (67.6)		$\chi^2 = 11.891$ df = 1 p < 0.001
調整済み残差	- 3.4	3.4		

なイメージを持っていても、この20年の間に父親を尊敬し父親のようになりたいと思う気持ちが減少していたことは、身近な大人のモデルである父親が内在化していない可能性を示唆しているのではないだろうか。

この20年間の親子関係は友達親子とか友愛家族といわれてきたが、父親の役割として期待されていた「男性や職業人のモデルとしての父親」「理想の男性・異性のモデル」としての姿は、過去のものへと崩れていくのであろうか。あるいは、期待すること自体に無理が出てきたのか、役割の変化なのか。このことは、先の父親イメージを構成する個々の項目がほとんど20年前より減少していることとも関連してくるのかもしれない。

しかし、今回の調査でも20年前と同じように母親が父親を肯定していると捉える児童は、否定していると捉える児童よりも父親に対して良いイメージを形成していた。このことは、この二つの要因の関連性が児童の中で時代の変化を超えて存在している枠組みであることを示しているといえよう。

父親を尊敬するとはどういうことなのか、男性としてのモデルになりうるのか、等を含めて父親の役割の検討がひろく議論されることが大切なのかもしれない。本研究は20年前の調査結果との比較を目的としていたので、父親に焦点を当てた分析となっている。この20

年間は社会的に男女（夫婦）のあり方が大きく変わってきた20年でもあった。今回は分析の対象にしなかったが、今回調査では児童からみた父親の母親観と母親のイメージや態度についても質問を行った。今後は、父親の母親観と児童の抱く母親イメージとの関連についても分析を行い、より全体的に夫婦と子供という基本的な形の意味について考えていくことで、離婚等による片親の親子関係のあり方も含めたより良い親子関係のあり方を検討していきたいと考えている。

## 文 献

- 1) (財) 日本女子社会教育会：全国家庭教育研究集会記録 青少年の問題行動と家庭教育，p.69，1982
- 2) 稲村 博：親たちの誤算，朝日出版社，p.44，1981
- 3) D. B. Lynn：The Father-His Role in Child Development, Wadsworth Publishing Company, Inc. 1978：今泉信人他訳：父親 その役割と子どもの発達，北大路書房，pp175-177，1981
- 4) 佐藤宏治：子どもにおける父親の精神的存在感に関する研究 母親の父親観が及ぼす影響を中心として，上越教育大学修士論文，1988
- 5) 朝日新聞：2006年9月14日付
- 6) 正高信男：父親力，中公新書，2002

- 7) 菅原ますみ・八木下暁子・他：夫婦関係と児童期の子どもの抑うつ傾向との関連，教育心理学研究50巻，pp129-150，2002
- 8) 小林佳子：父親像の世代間比較，教育社会学研究49集，1997
- 9) 上嶋正彦：子どもの父親観，教育社会学研究49集，1997
- 10) 小高 恵：親子関係の年代的推移，教育心理学研，41巻：pp192-199，1993

## 20 year change in child's father image as influenced by mother's attitude towards father

Kouji SATO\* Hisanaga SASAKI\*\*

\* Isobe-elementary school, Annaka-City, Gunma

\*\* Course of Nursing, School of Health Sciences, Akita University

We investigated the correlation between child's evaluation of Mother's attitude towards father and father's image and attitude over a period of 20 years.

We carried out surveys with approximately equal content on sixth grade students of three elementary schools in Gunma in 1987 and 2006. The subjects in 1987 were 350 persons (181 boys / 169 girls), and in 2006 were 218 persons (102 boys / 116 girls). The questionnaire covered 1) mother's attitude to father, 2) image and attitude of father.

As a result of the investigation, all surveys showed that the child's evaluation of his or her mother's attitude towards the father related to the evaluation of the father's image and attitude. In addition, the image of the father deteriorated generally over 20 years, and the respect to father and tendency to identify with his attitude deteriorated remarkably.